
ぬえのはな

トウカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬえのはな

【Zコード】

Z76160

【作者名】

トウカ

【あらすじ】

たつた一人の肉親を失い悲しみに囚われるナツキに問いかける少女の声。その声に引きずられて目覚めたのはダグラス国という見知らぬ場所。そこで出会った青年はナツキを食つという。

「あなたが私を見つけたのは、きっと死の匂いがしたからよ
ナツキの運命とダグラス国行く末を巻き込んでヌエが高く舞う。

「休みなさい」

よほど酷い顔をしていたのだろう。

住職は寺の一室と毛布を貸してくれた。鏡など一つから見ていいだろう。最低限の化粧さえしていない。

たった一人の肉親はあつといつ間に灰になつた。長い闘病生活を思い出す暇もなかつた。納骨してしまえば記憶さえ封じ込められたようになってしまいそうで、一欠けらだけこつそりと手元に残した。それを抱いてナツキは胎児のように丸まつた。

帰りたい。

還りたい。

どこに帰りたいのか、いつに戻りたいのかなど分かりもしないのに何度も何度も呟いた。

皆がいる幸せだったあの頃なのか。それとも母の病気の発覚する前だらうか。もつと前、そう生まれる前かもしれない。

まだ何も知らずに暖かい海のような羊水に浸かつて夢を見ていた頃。何一つ畏れは無かつた。鼓動を分け合つていたあの時に。

じわりと涙が浮いた。心がからからに乾いているのにまだ涙が出ることが何だか可笑しくって笑えれば、頬を伝つた涙が口もとに滑り込む。

しょっぱい。にがい。苦しい。

違うのだ。

欲しいのはこんなに冷たい水じゃない。
さらに身体を丸めた。

幻聴が聞こえる。

何ヶ月もまともに寝ていなかつたのだ。神経は擦り切れ悲鳴を上げている。

頭の中に他人の声が響くのはあまり珍しいことではなかつた。珍しいと言えば、その声が知つた声ではなく少々舌足らずな少女のようだといふことだ。

まるで労わるような囁きに夢を見ているのかと思った。けれど、視界には置が見えていた。かすかにイグサの匂いもする。障子の向こうには燃えるような空が透けて見える。

『ねえ』

やはり夢なのかもしれない。

夕焼けなど見えるはずが無いのだ。まだ曇日中。汗みずくの人々が墓参りへとやつてくる。

『生きているのが嫌になつた？ その世界に諦めがついたの』

身体の下に水の膜が見えた。

『なら、あの子を闇に還して』

何を言つているの。

人のことなど考える余裕はないのだ。

自分のことで精一杯。それだって手放してしまいたいのに。

『ほら、掘まえた』

えつ

言葉にはならなかつた。

開いた唇に水がなだれ込んでくる。

吐き出した泡が天上へと上つていいく。

星が見えた。

炎になぶられた空が赤く身を焦がす。

夕焼けじゃない。

そう思つた時には全身に水の重みが圧し掛かる。

肺が潰れる。

くるしいつ！ 助けて。誰か！

黒く変じ始めた視界に煌く鱗が見えた。

夜風は熱を孕んでいた。

人の嘗みの燃える音がする。火花が魂のように天に昇り、ぱちりと消え去った。

それを目で追っていた青年は引き結んでいた唇をようやく開いた。

「火までかける必要はないだろ？」

村の残骸は炎に舐めつくされ、焼け焦げた骨組みをさらしていた。村が賊に襲われてたという知らせが届き、駆けつけたがすでに賊の姿はなく、轟々と渦巻く炎だけがあつた。

村人は女も子どもも皆死に絶えている。

それを馬上から眺める人物が一人。豊満な肉体を無骨な鎧で覆つた女の瞳には惨劇に対するどんな感情も含まれていらないようだった。

「キヌア様。すぐに追いかけましょうー。我らの足は最速です。盜賊どもに遅れをとるはずがない」

今すぐにも駆け出しかねない青年に苦笑を一つ。

「まあ、待て。タカホ。地の利は向こうにある。明るくなつてからでも遅くはあるまい」

「こゝにはもう失うものはない。

この先に人家もなく、次の犠牲が出るとも思えない。それならば慣れぬ道を疾走する必要も無い。

「キヌア様」

小太りの男が汗を拭きつつやつてきた。

瞳の色は暗い。万が一の望みをかけて生存者を探していたが一人も見つけることが出来なかつたのだ。

一步を進むたびに気が滅入るだけだつた。

「生き残りはいません」

「そうか」

「“ヌエ”はどうした。こんなに忙しい時だといふのに」

奴の鼻があれば、暗闇であらうとも賊を追つことができるのに。苦い声は炎が弾ける音に重なつた。

「大方体を洗つていいのだろうよ。あれは人の匂いが嫌いなのよ」

蟲惑的な唇が細く長く息を吐き出した。
炎と同じ色の髪が風に流れた。

「朝一で出発する。各自休め！」

天幕が風で歪む。

薄い月に照らされた空に大きな影が躍つた。

天辺に足を乗せると鮮やかに滑り降りる。

幾度も爪を引っ掛け天幕を使い物にならないようにしたため、酷い目にあつたことがあるので慎重に爪は隠した。

音も無く地面に降りるとぽふんと天幕はもとの姿に戻る。お叱りの声は飛んでこない。

「入れ

空から降り立つた影はぎくんと身体を強張らせた。
どうやら大丈夫だと判断したのは早すぎたようだ。
鼻をスンと鳴らせば匂いは一人分。苦い苦いタバコの匂い。
これならばお説教があつたところで大した時間にはならない。
しぶしぶ、入り口の布を引き上げれば赤髪の美女が口唇を吊り上げて笑っている。

紅の魔女ことハンスフリード・キヌア。
ダグラス国¹の西の要であり、唯一の女将軍だ。

「今日は随分と遅かつたな。良い水場でも見つけたか？　口々は鼻が利くからな」

口々と呼ばれた青年が首を傾げた拍子に髪飾りがしゃらりと音をたてた。

外からの松明の明かりで天幕の中からは影絵のように真黒な人影しか見えなかつたが、キヌアには夜行性の獣のように光を帯びる青年の瞳が見えた。

「キヌア怒つてる？」

「なぜ、私が怒る？　今日は天幕を破らなかつただろう？」

ついこの間は、修復の聞かないほど大きな裂け目を作ったがために三日間、食料を取り上げられた。

「ここには死の匂いがいっぱいだ。キヌア、自分が作るのは好きだけど、他人がやるのは嫌いだろ？」

確かに死の匂いが充満している。

肉の焼ける匂いは火を消した後も土地全体に染み込んだように薄れはしない。

「獣風情が知つた口をきくな」

キヌアはくすりと笑う。

目元からは少し怒りが薄まつた。

「お前の言つとおりだよ。私は他人が荒らした土地の後片付けは嫌いでね。腹立たしいから、明日は奴らの腹を食い破つてやるさ。お前も休め。明日早い」

キヌアの言葉に重なるように小さなうめき声がした。
ここには死者と力の有り余つている兵士しかいない。
苦しげにうめき声を上げるものなどいるはずが無かつた。

「ココ。何を拾つてきた」

また怪我をした野犬でも拾つてきたのだろう。

いつもなら名前をつけて頼みもしないのに抱かせてやると持つてくれるといつに、今日は躊躇いがあるようだ。

野犬よりも厄介なものを見つけてきたのか。

キヌアの声は僅かに冷氣を帯びる。

「 ハハ 」

小ちなため息一つ。

それが合図となり人影は一つに分かれた。
とすんと音をたて床に落ちたのはぼろぼろの人間だつた。
細く血の氣の無い青白い肌が目に痛いほどだ。

「 ハビもじやないか。 どひしてこんなもの 」

「 ヒヒつ。 美味そつな匂いがするんだ 」

ハハは力なく伸びている人間の肩を掴み持ち上げ、首筋を舐め上げる。

あれは痛かるわ。 ハハの舌は猫の舌だ。 せつぜいつとやすりのようだ。

案の定、うめき声があがつた。

「 どひで拾つてきたんだ。 ヒヒ辺には別の人家はないぞ 」

村の生き残りには見えなかつた。
服装も顔つきもどこか違う。

「 水に沈んでた 」

「 水? 」

「 水浴びをしていたら急に水底にいたんだ 」

痛みで覚醒したのか、うつすら開いた瞳は漆黒だつた。

キヌアの姿を見つけると、はっと息をのんだ。

紅の魔女の噂話を聞いたことがあるものにしたら当然の反応だ。だが揺れる瞳に恐れはない。

キヌアは傍らに膝を着くと顎を持ち上げ此方を向かせた。折れそうな骨格。

戦火に追われて疲れなかつたのか濃い隈が浮いている。か細い悲鳴を上げる人物はとても賊の一昧には見えない。

「お前は誰だ」

「私は……な、き」

坂月ナツキ。喉が痛んでうまく声が出ない。

「ナキ？ 変な名前」

「ハハが笑う。全く邪氣の無い声で。

「ちが……ナツキ」

「ナキでいいよ」

「ハハがふんふんと鼻を寄せる。

ぎょっとしたナツキは咄嗟に身を引いたが、天幕に押されてもとの位置に戻ってしまう。

先ほどより近づいたハハに悲鳴を飲み込んだ。べろりと口元を舐められた。

「きやああ！ 何すんの」

今度こそ悲鳴が迸つた。

きんと響いた声に「ココは両耳を塞ぐ。

それでも響いたのか眉を顰め、ぶるると身体を震わせた。

ナツキはその隙に逃げ出した。

絡む足を叱咤して入り口の布に手をかけようとしたところで、視界が一瞬開け、銅色に染まった。

「キヌア様！ 何事です」

険しい顔の青年に驚いて動きを止めようとしながらも咄嗟のことで反応が出来ぬまま、鎧に包まれた胸にぶち当たる。

鈍い音の後、ナツキは地面へと転がった。

じんと脳髄が痺れ思考が乱れる。そこで初めて思った。

「ここは何処？」

「えっ？ あれ……子ども？」

予想外の人物の登場にタカホは瞬きを繰り返して転がっているものを穴が開くほど見つめた。

どれほど見ても少女だ。打ち付けた額を撫でている。

タカホと同じほど呆然とした顔だ。立ち直りはタカホの方が早かつた。

生き残りがいたのかと胸の奥で歓喜する。

「君大丈夫か？」

手を差し伸べれば、指先が触れる。温かい。生きているんだ。タカホの瞳には自然と涙が湧いてきた。

「あ、ありがとう」

突然泣きはじめたタカホに困惑の視線を送りながら厚意に甘えさせてもらひ身を起こす。

未だに何が起こっているのか分からない。

夢を見ているのだろうか。けれど額に残るじんとした痛み。

痛い夢なんて御免だ。苦しいのももつと嫌。
ほんの少し前、とても苦しかった気がするのだけれど頭の中にはモヤがかかっただようだ。

何があつたのだろう。分かるのはこの状況がどこか可笑しいということだ。

黙りこんでしまつたナツキをタカホが覗き込む。抱えた肩は痛ましいほど細い。

「触るな！」

「うわ

いきなり視界をものすごい速さで何かが通り過ぎた。
長い腕がタカホからナツキを奪い返したのだ。

「何をするんだよ！」

「お前の匂いが移る。不味くなるだろう

「はあ？」

虫でも払うような「」の動作にタカホの眉はつり上がつた。

「ナキは俺のだ。触るな」

自体についていけないナツキは口の腕の中で田を口黒させた。先ほど田の前にいた青年が急に遠くにいる。

射抜くような視線はあまりにも強くて、我知らず体が震える。幸いなことにその視線が貫いているのはナツキではなく、すぐ後ろの人物だが心臓には良くない。

いやいや、それどころか見知らぬ青年に所有物宣言をされてしまった。

「まつ、まつて！ 貴方だれ？」

抱きつかれたまま相手を見上げると青年はにっこり瞳を細めた。つりあがった口元には鋭い牙が見える。

「口口だ」

「口、口？」

繰り返せば嬉しげな笑みが降りてくる。

首筋に走った痛みに、ああ噛まれたのだと暢気なことを考えながらナツキは意識を飛ばした。

「食つていい?」

眠るナツキを抱きかかえたままココが問う。
頬の舌を這わせ涙の痕をなぞる。乳のように甘い。
もつと出ればいいのに。舌の先で丹じりを突いたが、出るのは掠
れたうめき声ばかりだ。

「ダメだ」

キヌアは深くため息をついた。

村の生き残りをココが見つけてきたというなんともあやふやな説
明で、なんとかタカホを納得させ追い返したばかりだ。

ココにさんざん文句を言い引き離そうと悪戦苦闘していたが、キ
ヌアが責任を持つてナツキを休ませると言えば渋々天幕を後にした。
問題をつれてきた張本人は、不満だと鼻を鳴らす。

「ここの間、人間を食つて腹を下しだろう。遠征が終わるまで待て

「いつ終わる?」

「お前の働き次第だな。ナツキを食いたければ励め」

「わかった

すぐつと立ち上がったココの背にキヌアの声が重なった。

「まて。ナツキはここに置いていけ」

「ええ？ ナキは俺のだ。持つて行く」

「ほつておけば、食つてしまつだらう。遠征が終わるまで私が預かつてやる」

しばし考えた後ココは首を振る。

大きな団体をして子どものように嫌だ嫌だと首を振る。

「キヌアといふと苦い匂いが移る。キヌアのその匂いは嫌いじゃないけど、ナキに移るのは嫌だ」

「……分かつた。天幕の中では吸わないよつとするを」

重度のタバコ愛好者としては中々難しいハードルを立てたものだが、それでもココは迷った。

食欲に従順な獣はうんと言わない。

「ココルデジカ」

魔法のような彼の本名は最終手段。

一瞬、口をひん曲げたものの、ナキを急いでしらえの寝台に横たえるとココは声も無く天幕を出た。外で「う」と風が渦巻いた。

ココが空を駆けたのだ。

キヌアは寝息を立てるナツキを見下ろした。

何の変哲も無いどこにでも居そうな少女だ。

服装さえ変えれば次の村で民に紛れさせたところで気づかないだらう。

だが、ココの鼻はこの少女が特別だという。

いきなり水の底に現れたという少女。ココは単純の頭の持ち主だ。
真実しか語らない。

「ふうん。面白い」

ココが、獣が人に興味を持つた。

気まぐれな獣を繋ぐための鎖。本人には悪いが中々良い拾い物をしたのかもしれないとキヌアはゆっくりと口角を上げた。

闇を裂いて大鳥が飛ぶ。

ぐるりぐるりと円を描いては、高く低く不思議な声で鳴く。闇色の羽は不吉だ。タ力ホは打ち落としてやりたい衝動を押さえ込んだ。

「なんでキヌア様はあんな獣を傍に置くのだろう」

「獣人が嫌いか。だが戦場にはつき物だ。マツリカ国には獣人部隊があるほどだぞ」

人の知能と獣の身体能力をもつ獣人は大変重宝されている。

そんな真実は分かりきっている。

多くの仲間を獣人により失い、また守られもした。

「分かつてゐるさ。別に獣人を全部嫌つてゐわけじゃない。俺はいつも嫌いなんだ」

「あれは“ヌエ”だからな」

一般の獣人がなれるのは一つの姿だけ。

だがヌエは複数の獣の姿をとることができる。

タカラたちが知っているだけでもココは獅子の姿と大鳥の姿をとれる。

あれは見掛け倒しのハリボテではない、獅子の牙と爪を持ち、空を誰よりも軽やかに飛ぶ。

赤の魔女が従えた死の番人。それがココの呼び名だ。

噛み締めた唇からは血の味がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7616o/>

ぬえのはな

2010年11月9日04時45分発行